

〔著〕 グリゴリ

〔插〕 山椒魚

⇒見捨てられた

万能者は、
やがてどん底から
成り上がる 4

シリウス

身勝手な理由でクロードをパーティから追い出した、『銀狼の牙』の元リーダー。野望を抱いて、魔王に降ったが……？

ハウザー

魔王軍四天王の一人。各地で暗躍している。

レイア

雌のムーンスターフェンリル。オークに襲われているところをクロードに助けられた。

ナビー

クロードの参謀役の女の子。元はレベルアップを告げるだけの概念だったが、彼に体を与えられた。

クロード

本作の主人公。超器用貧乏なジョブ「万能者」である事を理由にパーティを追放された。

ルーチェ

クリエール王国の第二王女。冒険譚が好きでクロードの大ファン。

エルリナ

真っ直ぐな性格をしたエルフの女性。故郷を離れ、現在はクリエール王国の諜報員として活動中。

MAIN CHARACTER

登場人物紹介

第一章 辺境の地マーディク

クリエール王国最強のSランクパーティ『銀狼の牙』を追い出された元荷物持ちの少年、クロード。

一度は失意に沈んだ彼だったが、一定の動作を繰り返す事でスキルや魔法を習得出来る特別なジョブ——『万能者』を駆使し、どん底から成り上がっていく。

クロードが率いる冒険者パーティ『天の祝福』は、王都を襲ったスタンピードを解決した事で、一躍名を馳せた。

ムーンスターフェンリルのレイアやその子供である五つ子狼に加え、レベルアップアナウンスに彼が肉体を与えた少女……ナビィ。

クロードはそうした『天の祝福』の面々に加え、リーダーのシリウスがいなくなった事で和解した『銀狼の牙』に所属する少女達と共に、複数のパーティが集まって結成するチーム——克蘭『守護者の集い』を結成。

あつという間にAランク克蘭に昇格して、各地から舞い込む依頼に奔走する日々を送っていた。

クロードがクリエール王国の第二王女、ルーチェとのティータイムデートを楽しんでから、数日が経ったある日の事。

彼を含む『守護者の集い』のメンバーは珍しく受けている仕事がなく、みんな思い思いに休日をお過ごししていた。

クロードが迷宮都市ネックにある克蘭ハウスに併設された牧場で家畜の世話をしていると、克蘭ハウスの方から何者かが近づいてくる気配を感じた。

作業の手を止めずに、クロードは『気配探知』で相手の素性を確認する。

(ん？ これは……王都の屋敷の管理を頼んでいたルシファアの配下か……何かあったのか?)

克蘭ハウスを出て、クロードが召喚した悪魔族の実力者——ルシファアの配下は、真つ直ぐこちらに向かってくる。

クロードは近づいてきた相手に声をかけた。

「君には、王都の屋敷の管理をお願いしていたはずだけど……こんなところまでわざわざやって来るなんて、そっちで何かあった?」

「……はい。王都の屋敷に国王の使いが訪れておりました。いかがいたしますか?」

「そうか。国王陛下の……」

報告に来た相手にバレないように、クロードは小さくため息をつく。

(王都の屋敷に使いを寄こしてまでなんの用だ? 俺に何かしらの話があるのなら、パルを通して『念話』してくればいいのになあ)

国王のところには、精霊族のシャリナの配下——大樹の精霊、パルがおり、クロードの命令で、双方の伝達役を担っている。

「わかった。これから会いに行くよ。屋敷の応接室に通しておいてくれ」

「かしこまりました」

クロードは一足先にルシファアの配下を王都に帰し、克蘭ハウスに戻って身支度を整えた。

そして仲間達に少し留守にする旨を伝え、足早に転移門を通り、国王の使者が待つ王都の屋敷の応接室に向かったのだった。

応接室には、優雅に茶を飲むオグスト宰相がいた。

「宰相閣下!? お待たせして申し訳ありません……それで今日は何故こちらに?」

「ああ、今日はクロード君……もとい、ブレイク伯爵殿にこれを渡そうと思ってね」

オーグストはクロードを家名で呼ぶと、傍らに置いていたカバンから何かを取り出し、机に置く。「……？ この書類は？」

クロードは机の上に並べられた書類を手に取り、確認した。

紙をめくる彼に、オーグストが言う。

「それは、王都の直轄領マーデイク領とその周辺が載っている地図だ。以前話した通り、この地を君に治めてもらいたい。他の資料には、これまでに確認されたマーデイク領で採取出来る資源をまとめてある。領地を治めてもらうにあたっては色々準備中だが、渡せる情報を先に共有しておこうと思っただけ。有意義に活用してくれ」

「ありがとうございます。どんな資源があるのか知れただけでも、大助かりですよ。宰相閣下」

クロードが頭を下げると、オーグストは微笑んだ。

「そうか。それはよかった……今はまだスタンピードの後始末で王城がバタバタしててな。とはいえ、数日中には国王陛下からパル殿を通してお声がかかるはずだ。その時にマーデイク領についても話があるだろう。それまで、ブレイク伯爵殿には王都の屋敷、もしくは克蘭ハウスにて待機を命ずる。以上だ」

オーグストの指示に、クロードは頷いた。

用意された茶をしっかりと飲み干し、オーグストはブレイク伯爵邸を出ていった。

王都の屋敷から克蘭ハウスに帰ってきたクロードは、作業が途中になっていた牧場へ向かう。牧場では、クロードが途中で放置していた作業をケイト、アイリ、マルティといった『銀狼の牙』の面々が黙々と進めてくれていた。

「クロード、戻ってきたのか。畑と牧場の手入れはもう終わる。克蘭ハウスに帰って休憩しよう」

ケイトはクロードの手を握り、アイリ、マルティと一緒に克蘭ハウスへ戻った。

屋敷の中にあるラウンジに入る。

そこでは従魔のレイアとマルルが人化した姿でカウンター席に腰かけ、グラスを傾けていた。

「お！ 二人とも昼間からお酒かなあ？」

「むう、小言を言うな。アイリよ。もう四時じゃし、昼間というよりは夕方じゃ。それに今日はたまの休暇。少しくらい呑んでもいいじゃろう」

マルルは頬をぷくぷくと膨らませて、アイリに反論した。龍王国の元女王にしてエンシェントドラゴンであるマルルだが、レイアと共に人化していると、可愛らしい女性にしか見えない。

「まあ確かに。今日は休暇だしねえ。私達も少し呑もう」

アイリはカウンター奥にいるゴーレム――魔道具に精通した悪魔族のアモン製――に、ドリンク

を注文した。

ゴーレムがアルコール度数低めのカクテルを作り始める。

クロードがケイト達と四人がけの席に座り、待つ事数分。

お酒の入ったグラスを四人分持ち、カウンターを出たゴーレムがこちらにやって来た。

グラスをテーブルに置き、持ち場に戻っていく。

「……本当に凄い魔道具ね」

アイリがグラスに入ったお酒をまじまじと見て、呟いた。

その隣で、マルティも同意を示す。

「ええ、本当にアモンさんの作るゴーレムさん達は凄いです。このお酒を造ってくれたゴーレムさんしかり、洗濯やお掃除、果てには食事を作ってくださるゴーレムさん。どれも素晴らしい働きをしてくださる方ばかりです」

広いクランハウスで暮らすクロード達だが、アモンのゴーレムが家事をこなしてくれているおかげで快適に過ごしている。

マルティの意見には、ケイトも同感だ。

「そうだな。今から今日の夕食が楽しみで仕方ない……話を交えるが、王都の屋敷には何をしに行っていたんだ、クロード？」

「ああ、実は宰相閣下が国王陛下の使者としていらっしやっています。これをもらったんだ」

クロードはオーグストからもらったマーダイク領の地図や、そこで採れる資源のリストをテーブルの上に出した。

「……これがクロードの領地になる辺境の地図か」

ケイトの呟きが聞こえたのか、カウンターでお酒を呑んでいたレイアとマールが寄ってくる。

クロードはテーブルを覗き込んでくるマールに、書類の一つを渡した。

「こっちの書類には、マーダイク領で採取出来る資源がまとめられているんだ。よかったら読んでみて」

「……ほお。これ程の資源が採れるとは。ここを開拓するのじやろう？ 領地に行く日がますます楽しみじゃのう」

その後、クロードはナビィやペロニカ、ミレイといった、ラウンジにいなかった『守護者の集い』のメンバーにも、今回の情報を共有。

充足感に包まれて眠りに就いた。

なお、コックゴーレムの作ってくれた夕食は、例に漏れず大変美味しかった。

王都の屋敷でオーグストから書類をもらってから何日かした頃。

彼の言っていた通り、パルの力を借りた国王から『念話』が届いた。

『おお、クロード。連絡が遅くなつて悪かったな。こっちもバタバタしておつて、やっと落ち着いてたところだ……こちらも落ち着いたら、いよいよお前達にはマーデイク領を訪ねてもらおうと思ふ』

ここ数日ずっとマーデイク領について思いを馳せていたクロードは、待ち望んでいた指示に拳を握った。

『……やつとですか。俺達はいつまでにこつちを出ればいいんですか？』

『うむ。その事だが……お前達には至急、マーデイク領へ向けて発つてほしい。こちらからも開拓のための作業員を派遣しておるのだが、難航しておつてな。というのも、マーデイク領の大半を占める魔の大森林の木は、堅牢木けんろうぼくというのだが……Aランクの大型モンスターモンスターの体当たりでもビクともしない硬さなのだ』

『じゃあ、まさか……』

『……うむ。土地の開拓は、お前達「守護者の集い」に全面的に任せる。頼めるか？』

国王の言葉に、クロードは少し思案してから頷いた。

『……なるほど。わかりました。とはいえ、俺達にも諸々の準備があります。そうですね……二日後にマーデイク領に向けて発ちます』

その後は他愛ない近況報告をして、クロードは国王との『念話』を終えた。

自室を出て、克蘭ハウスにある執務室を目指す。

執務室では、執務専用ゴーレムが『守護者の集い』が遂行した依頼の決算処理を行っていた。

ゴーレム達に交じり、克蘭の経理や依頼受付といった事務を担当するミレイも作業に勤しんでいる。

「ミレイ。今ちよつといい？」

「ええ、大丈夫だけど……どうしたの、クロード？」

「少し話があるんだよね。一階のラウンジまで来てほしい」

「わかったわ。この書類を片付けたら行くから、先に行っていてくれる？」

クロードは執務室を出た。

そして、ルシファーを召喚して他の克蘭メンバーをラウンジに集めるように指示すると、一人ラウンジへ向かった。

クロードがラウンジで待つ事しばらく。

『守護者の集い』のメンバーが集結した。

「みんな、急に集まってもらってごめん。さっき国王陛下から、マーデイク領の開拓について指令が出た」

仲間達が目を睜る。みんなを代表して、ナビーが尋ねる。

「……それで、国王陛下はなんと？」

「うん。それが——」

クロードは国王と話した内容をみんなに共有した。

「……なるほど。確かに、国王様がおっしゃるのように、作業員の方々の実力では開拓が困難な土地かもしれないね」

ナビーに続いて、マールが言う。

「宰相にもらった地図に、マーデイク領とその周辺に生息しているモンスターが載っておったが……以前行ったドラゴンマウンテンの樹海に棲むモンスターと、遜色のない力を持っているようじゃのう。この国にはモンスターの討伐を任とする騎士団がおるが、彼らが本来の仕事と並行して開拓を行うのは厳しかろう。ここはわし達で開拓を進めるのが良さそうじゃな」

その日、クロードは自分達が留守にする間の諸々の作業について、ルシファー、シャリナ、天使族のミカエルといった召喚組と、そして彼らの配下に引き継ぎを行った。

もし何かトラブルが起きても迅速に対応出来るようにし、マーデイク領遠征の準備を終えたのだった。

国王から念話が来てから二日経った。

今日はいよいよクロード達『守護者の集い』がマーデイク領へ向かう日だ。

『守護者の集い』の克蘭ハウスでは、居残り組のミレイ、魔界から呼び出されたアモンと彼女が作り出したゴレム達、そしてルシファー達召喚組の配下が玄関まで見送りに来ていた。

戦闘力に乏しく同行出来ないミレイが、心配そうに口を開く。

「みんな、気を付けてね。私もそっちが一段落したら応援に行くから」

「うん、それまで留守を頼むよ」

クロードはミレイ以外の『守護者の集い』のメンバーを連れ、マーデイク領へ旅立った。

『守護者の集い』が克蘭ハウスを発つてから三日後。クロード達遠征組はマーデイク領に足を踏み入れた。

マーデイク領は、克蘭ハウスがある迷宮都市ネットワークとは真逆の方向にある土地だ。それにもかかわらず僅か三日で移動出来たのには、理由がある。

まずクロード達はベロニカの生家——ミーガン子爵家が治めるミーガン領の都市マイルに、転移魔法で移動した。

そこからは特製の大型馬車に乗り、ミーガン領に隣接するマーデイク領を目指したのだ。

そんな旅を経て辿り着いたマーデイク領だが……クロード達の目に映る木、木、木。

彼らの目の前には、まさに樹海と言わざるを得ない光景が広がっていた。

「……凄い光景ね。なんでこの地の名称が魔の大森林なのかしら。絶対に魔の大樹海の方が合っているわ」

みんな、アイリの意見に大賛成だ。

見渡す限りの木、木、木……そして、先程から絶えず聞こえてくるモンスター達の唸り声。

絶対に樹海の方がピッタリな名称である。

「……さあ、気を取り直して作業に取りかかろう」

クロードの号令によって、『守護者の集い』は開拓を開始した。

まずは眼前に広がる木々を刈らねばならない。

魔法が使える者は【ウィンドカッター】、【アイスカッター】といった風や氷の刃を放ち、複数の大木を同時に切り倒す。

魔法に長けていない剣士職の面々は剣を斧に持ち替え、自身の筋力にものを言わせて、力任せに木々を叩き切るのだった。

魔の大森林に生い茂る木々を伐採し続けていると、あつという間に夜になった。夜空には星が瞬いている。

夜行性の凶暴なモンスター達が目覚めてきたのか、周囲からは、ここに来た時よりもさらに荒々しいモンスター達の唸り声が聞こえ始めていた。

「みんな、今日の作業はもう終わろうか」

クロードはそこら中に散らばっている木をアイテムボックスにしまい、代わりに内部を魔法で拡張した魔道テント（豪邸型）を取り出した。

切り開いたばかりの場所にテントを設置し、辺りにモンスター除けの結界を張っておく。
一同はテントに入る。

「キッチンでコックゴレムが夕食を用意してくれているから、俺達は先にお風呂に入っちゃおうか。食事の準備が出来る前に、汚れを落として溜まった疲れを取りたいし」

「そうだな、クロード。私もスッキリしてから食事をしたい。他の者もそれでいいか？」

ケイトは後ろを振り向いて問いかけ、仲間達から了承を得た。

全員で大浴場へ向かい脱衣所に入ると、ケイト、アイリ、マルティが急にモジモジする。

一緒に暮らし始めてかなり経ったが、三人はまだ全員で……というより、クロードと一緒に風呂に入る『天の祝福』の習慣に慣れず、羞恥心を覚えているようだ。

（こればかりは慣れてもらうしかないからな。ケイ姉達が嫌なら無理しなくていいんだけど、除け者にされたくないみたいだし……）

クロードはケイト達三人に極力配慮し、先到大浴場に入った。

しかし、そういう時程トラブルが起こるものである。

体に大きめのバスタオルを巻き、クロードのあとに続いて大浴場に入ったケイトだが……

大浴場の床、全体に敷かれたツルツルのタイルで盛大に滑り、勢いよくクロードの背中へ突っ込んだ。

「きゃっ！」

「うわっ!？」

咄嗟に体を捻ったものの、クロードはケイト諸共タイルに倒れ込んでしまう。

「ううう、痛た……!?! いったいなんだ？ ケイ姉、平気？」

クロードが身じろぎすると、彼を下敷きにしていたケイトが震えた。

「あん……! あっ、クロード！ う、動かないでくれ。下腹部が当たって、こ、擦れる！」

ケイトの言葉を聞いて、クロードは瞬時に事態を理解した。

慌てて身を起こしてケイトから離れ、「ご、ごめん！」と顔を背けて謝罪する。

「……いい、いやいい。気にするな。私が滑ってぶつかってしまったのがいけないんだ」

顔を真っ赤にしたケイトは、俯きがちに言った。

そして、そそくさと湯船へ向かっていく。

気まずいクロードとケイトを除き、『守護者の集い』は和気あいあいとお風呂を堪能するのだった。

その後、大浴場を出た一行はリビングで食卓を囲み、明日に向けて眠りに就いた。



翌日。

開拓したばかりの土地の中でも小高い丘おおかのようになっていてる場所に、クロードは領主邸となる屋敷の基礎きそを作り上げた。

「屋敷の基礎にはどうしても石材が必要だったから、魔の大森林に大きめの岩がいくつもあって助かった。この量なら、あとで作る城下町の建物なんかの分も間に合いそうだし、よかったよ」

クロードは、仲間達が伐採する木々を黙々と木材へ加工していった。

屋敷に使用する木材の確保を優先しているうちに日が暮れたので、実際に屋敷を建てるのは翌日にする事にした。

次の日。ついに領主邸の建設着工の日である。

スキルも魔法もアイテムも、なんでも作れるアルティメットスキル——『創造そうぞう』を使えば、あつ

という間に豪邸を築けるのだが、今日はそうしない。

何故なら、クロードはこの日のためにアモンに秘密兵器を用意してもらっていたからだ。

アモン謹製建築ゴーレムのの、お披露目の瞬間である。

クロードはアイテムボックスから建築ゴーレムを数体取り出すと、彼らを連れて建設現場となる小高い丘の頂上へ向かった。

早速、ゴーレム達は昨日クロードが準備した木材や、建築道具である工具を担ぎ、作業を開始する。

ゴーレム達が建築を進めている間、クロードは仲間達と共に開拓した土地をさらに拡張し、城下町を作るスペースを確保するための伐採に精を出した。

伐採を始めてから数時間後。夕焼け空に星が見え始めた頃、領主邸が出来る小高い丘を中心に、半径十キロ程の開拓が終わった。

そして小高い丘の上には、遠くからでもわかるくらい立派な三階建ての屋敷が出来上がっていた。帰る道すがら辺りを見回していたクロードは、完成した領主邸を見て目を丸くする。

「……え!? もう出来たの!?!」

クロード達はゴーレムが作り上げた三階建ての屋敷の目の前までやって来た。

「まさかたった半日で屋敷を完成させるなんて……流石アモンの作ったゴーレムだな。他のゴーレムの例に漏れず、彼らも優秀だったみたいだ」

クロードが呟くと、他の者も頷く。そして、クロード達は屋敷の中へ入った。

領主邸の内装は、王都の屋敷を参考になっている。外観以外は特に変更しておらず、間取りや調度品も全く同じだ。

クロード達はダイニングでコックゴーレムが作ってくれた弁当を食べ、次の日に備えてそれぞれの自室で眠りに就いた。

開拓生活、四日目。

クロード達は朝からリビングに集まり、テーブルに大きな紙を広げて、これから作る城下町の相談をしていた。

紙の上に屋敷の場所を書き込んだクロードは、それを囲うような円を描く。この円が、城下町の予定地だ。

「まず、領主邸を中心に街を四つの区画に分けて……」

二本の線を引き、城下町予定地を四つの区分に分ける。

そして、図面を指差して言った。

「よし。みんなに意見を聞きたいんだけど……街に、何が欲しいかな？」

「そうね。私としては東に商業区、西に工業区、そして南と北に居住区と、目的別に区画を使い分けるのがいいと思うわ」

「なるほど……アイリさん、商業区と工業区を東西に置こうと思った理由を、具体的に教えてくれない？」

クロードが尋ねると、アイリは説明を始めた。

彼女によると、商業区を東に置く事で隣のミーガン領や、その先にある王都との距離が近くなる、既存の街道も利用出来る……といったメリットが多く、こちらに商業区があった方が他領とのやり取りを円滑に行えるとの事だ。

また、工業区を西に置く理由は、魔の大森林に近いからだそうだ。

魔の大森林はモンスターの巣窟だが、冒険者や兵士がいれば十分に抑止出来る。魔の大森林で採れた素材を、街の中に運ぶ手間を減らせるのではないか……という話だった。

「確かに。アイリさんの言う通りにした方が、色々と上手くいきそうだな。何かトラブルが起きたら、その都度領民達に意見を求めて改善していく事にしようか」

他にも仲間達のアドバイスをいくつか聞き、クロードは話を終わらせた。

そして描き上げた図面を丸めてアイテムボックスにしまい、みんなを連れて屋敷の外に出たのだった。

外では、現在進行形で建築ゴーレム達が働いていた。領主邸の直ぐそばに、小さめの離れを建てるためだ。

この離れには、クロードが辺境の地で役に立ちそうな道具を作るための錬金室や、みんなの趣味のための部屋が設けられる予定だ。

クロード達の注文が細かすぎたようで、離れの建設の進捗はまだ半分程である。

離れの完成度を確認したクロード達は、その場を離れた。そして、あらかじめ用意していた石材を用い、土魔法で小高い丘から下りる道や、緩やかな石畳の階段を作る。

階段が出来れば、次は屋敷が立っている丘を囲う防壁……言わば、第一防壁の建設に移った。

クロードは仲間達と別れて、一人で丘を下りる。そして十分な距離を取ると、地面に手を当てて土魔法を行使した。

すると――

ゴゴゴゴゴゴ――!!

丘を囲うように高さ七メートル、横十数メートル、幅五メートル程のゴツイ壁が出現した。クロードは同じ事をさらに数回行って、丘を完全に囲う。そして、仲間達と協力して武骨な土の壁を整備していった。

防壁の整備が終わる頃には、クロード達の要望満載まんさいの離れもほとんど完成していた。あとは最後の仕上げを残すだけだ。

「この離れが出来れば、これから出来る街の防衛に必要な魔道具を作れるね」

「はい。ですが、今日は既に日が落ちています。魔道具の製作は明日からになさってはいかがですか？」

ナビーの指摘はもつともだ。クロードは素直に従い、その日の仕事を終わらせた。

その後は夕食をとって風呂に入ると、みんな早々に就寝するのだった。

翌日。クロードは今朝完成したばかりの離れにて、魔道具の製作に取りかかっていた。この離れには大小様々な個室がある。

クロードが今いる部屋は、地下にある錬金室だ。

ここはクロード、そしてアモンが魔道具を製作する部屋であり、クロードは今、街を覆う結界を張るための魔道具を試作していた。

「えっと、結界の形状はドーム状にして……街に入ろうとする人物やモンスターの悪意や敵意を感じて、危ない奴を弾けるようにして……範囲は……試作品だし、とりあえず錬金部屋が収まる位の大きさで……」

クロードは自らが編んだ魔法陣を、準備しておいた水晶玉に封じ込める。これで結界の魔道具の試作品が出来た。

完成させた魔道具を置き去りに、クロードは錬金部屋を出た。遠隔で魔道具を起動させると、ドーム状の結界が部屋を覆うように展開される。

「きちんと結界が働くかテストしよう」

クロードは「錬金部屋を壊してやる」という気持ちで、部屋への侵入を試みる。

——バチン！

扉を開けようとした彼は、水晶玉に組み込んだ魔法陣の設定通りに、結界に弾かれてしまった。

「よし!! 成功だ。あとは完成品を作って、領主邸の地下に作った部屋に設置すればいい……そうだな。完成した魔道具を置く台座も作らないと。丁度石材が余っているし、それで作るか」

そうして、クロードは結界の魔道具の製作と台座作りに没頭した。

昼食の時間を知らせてきたケイトによって作業が中断させられるまで、部屋には錬金術が生み出す金色のスパークが輝く^{かがや}のだった。

結界魔道具を完成させて、領主邸の地下室に設置、起動させた翌日。

クロードは国王と宰相のオーグストに作業の進捗を報告すべく、転移魔法で王城を訪れていた。

「——というわけで、城下町の予定地には結界を張り終えました。領都開発のため、人員の派遣をお願いします。結界内は絶対に安全ですので、騎士団の方々は少人数で結構です。出来れば、大工などの建設業の人達を多く派遣していただけると助かります」

「うむ。わかった。早速手配しよう」

そう言った国王がオーグストへ視線を向け、小さく頷く。

直ぐにオーグストが席から立ち上がり、一礼して退室していった。

「しかし、結界の中は安全なのか……では、ルーチェをそちらに行かせてもいいかもしれないなあ。あやつもお前達に中々会えなくて毎日寂^{さび}しがつておるのだ。どうだ、ブレイク伯爵よ」

「……ええ、そうですね。領主邸は既に出来ていますので寝泊^{ねど}まりには困りませんし、ルーチェ様には契約精霊のバルが付いています。戦力的にも問題ないかと」

「そうか。では、マーデイク領に戻る時に、ルーチェを連れて行ってやってくれ。あの子も喜ぶだろう。頼んだぞ、ブレイク伯爵」

国王にルーチェを連れていくように言われたクロードは、応接室を出て、ルーチェの私室に足を運んだ。

——コン、コン。

クロードがルーチェの部屋の扉をノックする。

すると、中からウキウキしている気持ちを感じさせるかのように元気な声が聞こえてきた。

「はい！ どちら様ですか？」

「クロードです。お迎えに参りました。俺と一緒にマーデイク領へ行きましょう」

ルーチェは勢いよく部屋の扉を開けた。

「お待ちしておりましたわ!! 話は父とバルから聞きました。旅支度も既に済んでおりますのよ。クロード様、さあ参りましょう。『天の祝福』や『銀狼の牙』の皆様にお会いするのは、久しぶりですわね。とても楽しみですわ」

そう言って、ルーチェは荷物が詰まった大型のトランクケースを部屋から運び出そうとする。

そんな彼女を、お付きのメイドが制止した。

「ルーチェ様。はやる気持ちはお察ししますが、まだお待ちを。今回はマーデイク領へ派遣される人員と共に移動なさるのでしょう？ 国王陛下の人員手配が完了するまで、まだ時間がかかりますわ」

「おっと、そうでしたわね。クロード様にお会い出来た事が嬉しすぎて、失念していましたわ……クロード様、準備が出来るまで私の部屋でお茶でもいかがでしょうか？ 今までの冒険の話の聞かせてくださいませ」

使いの者がやって来たのは、冒険の話をしつつお茶を飲んで時間を潰し始めてから、丁度三時間が経過した時だった。

「失礼いたします。ルーチェ第二王女殿下、ブレイク伯爵閣下。マーデイク領へ派遣する人員の準備が整いました。大人数ですので、王城の中庭に待機させています。国王陛下と宰相閣下も既にいらっしやっておりますよ」

クロードとルーチェは、使いの者に連れられて中庭に向かった。

中庭には、百人を超える大工と国王、そしてオーグストが待っていた。

「国王陛下、宰相閣下。ルーチェ第二王女殿下とブレイク伯爵閣下をお連れいたしました」

「うむ。ご苦労であった。下がってよい」

国王の言葉を聞き、使いの者は一礼してその場を去っていった。

「さて、待たせたなブレイク伯爵よ。彼らがこれからマーデイク領における城下町の建設を担う者達だ。足りなければ追加の人員を派遣するが……まずは彼らと頑張ってくれ。健闘を祈るぞ。ではな」

国王はクロードの隣で大人しく控えていたルーチェへ軽く目配せすると、オーグストを連れて中庭をあとにした。

国王とオーグストを見送り、クロードは中庭に集められた大工達に向き直る。

「それでは改めて。あなた達がこれから向かうマーデイク領を治める事になった、クロード・フォン・ブレイクです。こちらは俺の婚約者であるルーチェ様。知っていると思いますが、この国の第二王女です。俺には他に何人か婚約者がいますから、あつちに着いたら紹介します……それでは出発しましょう」

クロードがそう言うと、足元に転移魔法陣が現れる。

そして、彼は大工達とルーチェ、そしてルーチェのお付きのメイドと共に、マーデイク領の領都に『転移』した。

みんなと一緒にマーダイク領へやって来たクロードは、早速、大工達のうちリーダー格の者数名を集めた。彼らを領主邸の会議室に連れていき、自身の婚約者達を紹介する。

そして、領都の設計図を見せて話し合いを始めた。

「――それで、この図面が俺達があらかじめ考えておいた設計図なんですけど……このまま進めているのか素人の俺達じゃ判断がつかなくて。意見を聞かせてもらいたいんです」

「ふむ、なるほどな。概ね問題はなさそうだが……」

大工の一人が言葉を区切り、辺りを見回す。

「ところで、この領主邸は誰が作ったんだ？ 作り手の真心が細部から感じ取れる。中々の腕を持った大工の仕事だと思うが」

その質問に、クロードはアイテムボックスからアモンが作ってくれた建築ゴーレムを取り出した。「この領主邸と隣に立っている離れを建てたのは、このゴーレム達です。ここにはいない仲間の一人に作ってもらったんですが、中々優秀で重宝しています」

建設業者のリーダー達は、その言葉に興味を引かれたらしい。クロードが取り出したゴーレムを隅々まで見て、興味深そうに触って調べている。

クロードはそんな彼らからアドバイスを受けて細かな修正を加え、領都の設計図を完成させた。

そして、翌日からマーダイク領の領都開発に着工する事を宣言するのだった。

マーダイク領の領都開発が始まってから、早いもので二週間が過ぎようとしている。

クロードはまず、大工達に居住区の建築に取りかかってもらった。アモン製の建築ゴーレムの活動もあり、こちらにはみるみるうちに家が建てられた。領都開発は順調だ。

しかし、最近の彼には気になる事があった。

どうもこの頃、魔の大森林に生息するモンスターの数が、クロード達がこの地にやって来た時よりも増えてきているようなのだ。

街を守る結界があるとはいえ、これは由々しき事態だ。

クロードは『守護者の集い』の面々……もとい、自身の婚約者達を領主邸の会議室に集めた。

そして、何故モンスターが増えてきたのか話し合う。

「――まさか、大森林の奥地に強力なモンスターでも生まれたのでしょうか。弱いモンスターが棲み処を追われ、この地に押し寄せてきているのでは？」

ナビーが一つの仮説を口にする、アイリは頷いた。

「その線もあるけれど……私は新しいダンジョンが出来た可能性を考えているわ。意外と、ナビー

と私、両方ともが正しいかもね」

「なるほど……」

クロードは相槌を打ち、考え込む。

(……どちらにしても、厄介な事態になる。しかも、最悪両方の可能性だって？　ここは俺達で大森林の偵察をした方がいいかもしれない。頑張って領都開発をしてくれている大工達に余計な心配をかけないように、こっそり、慎重に事を進めよう)

クロードは自身の考えをまとめ、今後の方針を婚約者達に伝えた。

そして、念のため領主邸にはルーチェとパル、ルーチェお付きのメイドに待機してもらい、仲間と共にこっそり街を出たのだった。

街を覆う結界を出て、大森林に入っただけしばらく歩く。

すると、大森林の奥地からクロード達の方へ向かってくる大量の気配を感じた。

「……何かがこっちに向かってきているみたいだ。敵を排除し次第、複数班に分かれて大森林の調査を行う。みんな、よろしくね」

クロードの言葉に、仲間達が頷く。

——ドタドタ、ドタドタ！

クロード達が戦闘準備を整えて少しすると、前方から何か走ってくる音が聞こえてきた。

「来るぞ。備えろ!!」

そして、ついにその何かが姿を現す。

「グレートスタンプボアの群れ……!?!」

「いいえ。それだけではありません。群れの後ろを見てください」

ナビーの言葉で、クロード達は一斉にグレートスタンプボアの群れの後方を凝視した。

「な!?　あれは!!」

グレートスタンプボアの群れの後方に見え隠れしている巨大な影——その正体はなんと、手負いのSSランクモンスター、黒竜であった。

「なんでこんなところに黒竜がいるんだ!?　しかも手負いで……とりあえず対処しないと!　結界内にある俺達の領都はともかく、隣領のミーガン領に逃げられたら、向こうの土地で被害が出てしまおう」

クロードは一度、遠く離れたミーガン領がある方角を見据えた。

そして覚悟を決めると、自分の武器を構える。

クロード達の目の前で、グレートスタンプボアの群れが迫ってきた。

『『四聖結界』!!　——よし。足止め成功だ。みんな!!　行くぞ!!』

ケイトをはじめとする仲間達は、クロードの結界術で足止めを喰らったグレートスタンプボアに一斉に飛びかかった。

突如として出現した透明な壁によって足止めされたグレートスタンプボア達は、為す術なくケイト達に倒されていく。

あつという間に最後のグレートスタンプボアを倒した一行は、群れの後方からこちらの様子を窺っていた黒竜と対峙した。

グレートスタンプボアの群れを倒し、早数分。

睨み合いが続く中、先に仕掛けたのは黒竜の方だった。

黒竜は傷ついた翼を羽ばたかせ、巨大な竜巻を起こす。

竜巻は方向を問わずクロード達に迫った。そして、彼らを一瞬で呑み込んでしまう。

「ギャアオオオ!!」

クロード達が巨大竜巻に呑み込まれたのを見て、黒竜は自らの勝利を確信したかのように咆哮を上げる。

ところが、巨大竜巻を喰らった一行は、ドーム状に展開した『四聖結界』によって事なきを得ていた。

嵐のように吹き荒れる風の中で、アイリがぼそりと呟く。

「まさか初撃にこんな大技を放ってくるなんて。あの黒竜、相当余裕がなかったのかしらね。普通は人間になんて目もくれないでしょうに」

「うむ。確かにそうかもしれないのう。しかし、あの黒竜はいつたい何にあそこまで痛めつけられたのかのう? 翼があそこまで傷んでおっつては、治ったとしてもなんらかの後遺症が残るじやろうな。哀れな生を送らせるのは酷じゃし、ここで楽にしてやるか」

マールの言葉に、一同は頷いた。

クロードやケイト、ベロニカといった剣士職の者は、暴風をまき散らす巨大竜巻に向けて、剣を構える。

ナビィ、アイリ、マルティといった魔法職の者は、手のひらに魔力を集めた。

レイアやマール、五つ子狼達もまた、集中する。

そして息を合わせ、クロード達は魔力を乗せた斬撃を、ナビィ達とレイア達は純粋な魔力の塊……魔力弾を放った。

——ズバツ!! ズドン!!

「ギューア!?」

竜巻の中から突如放たれた攻撃を、黒竜は間拔けな声を出しながらかろうじて回避した。一拍置いて事態を理解し、黒竜が地上へ目を向ける。

そこにはもはや竜巻などなかった。代わりにあるのは、傷一つなくピンピンした様子で立つ、クロード達の姿だ。

クロード達は、斬撃と魔力弾によって竜巻を霧散させたのだ。

黒竜の困惑顔を見るや否や、『守護者の集い』の面々は一斉に駆け出す。

(この隙を逃すわけにはいかない。ここで一気に片付けさせてもらうぞ!! 黒竜!!)

前衛のクロードとケイト、ペロニカ、レイア、マール、そして五つ子狼達は、後衛のナビーの支援魔法を受け、黒竜に攻撃を仕掛ける。

ナビー以外に、アイリとマルティが後衛として残っていた。二人はクロード達が安全に黒竜に接近出来るように、様々な魔法を放って牽制する。

アイリとマルティの放った魔法に気を取られ、黒竜が僅かに視線をそらした。

前衛組がその隙に乗じて空中に飛び上がり、黒竜に切りかかる。

クロード達の斬撃は、なんの抵抗もなく黒竜の体を切り裂いた。

「ギャアアア!!」

耐えがたい痛みにも、黒竜は堪らず天に向かって咆哮を上げながら落下した。そして、地面をのたうち回る。

「……みんな、後退するぞ。黒竜との距離を取るんだ……ナビー!! アイリさんとマルティさんと

一緒に攻撃魔法を撃って!!」

後方で待機していたナビーとアイリ、マルティは、クロードの指示を受け、黒竜に追い討ちをかける。

——ドガガガン!!

「ギユアアア!?!」

黒竜は再びの激痛に悶絶した。

「——今だ!! 畳みかけるぞ!!」

動きが止まった黒竜を見て、クロードが号令をかける。

全員が黒竜へ駆け寄り、魔斬や魔力弾、魔爪などを叩き込んだ。

かくして黒竜は力尽き、魔の大森林の地に沈んだのだった。

黒竜を倒した頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。遅い時間にはなってしまったものの、クロード達は無事、領主邸に帰還する。

お風呂に入って夕食をとり、今はみんなでリビングに集まり、明日の予定を話し合っていた。

「しかし……あの黒竜は明らかに様子がおかしかったね。SSランクのモンスターだから、魔の大森林にいる事自体はそう意外じゃないけど……問題は、その黒竜が何者かによって既に手負いにさ

れていたって事だよな」

「そうね。それは私も思っていた事ね……ねえ。みんなもそうでしょ」

アイリの言葉に、他の仲間達も頷く。

すると、マルティが手を挙げた。

「そこで提案なのですが……黒竜と遭遇した付近の調査を、近日中に改めてやってみるのはいかがでしょうか。これからこの地には領民となる方々が移住してきます。その前に、不安要素は出来る限り解決しておくのがいいのではないかと思います」

「そうだね。でも、この広大な大森林の調査をするとなると、俺達だけじゃ時間がかかるから……そうだし!! アモンに頼んで調査用ゴーレム……調査だけでなく、出来れば、諜報活動や密偵みたいな事が可能なゴーレムを作ってもらおう!」

クロードは今後の方針をまとめ、その日は眠りに就いたのだった。

翌日、朝食を取ったクロードは『転移』して、ネックの郊外にある克蘭ハウスに居残っているアモンを訪ねた。

——コンコン。

クロードが研究用の小屋の扉をノックすると、しばらくして中から声が聞こえる。

「……誰? なんの用?」

「クロードだけど、今少しいいかな。ちょっと相談……というかお願いがあるんだけど」

「ああ、あんたか……いいわよ、入って」

クロードはアモンの声に促され、中に入る。

「その椅子に座っていなさい。お茶を出すから、ちょっと待っていて」

お茶を淹れてもらい、クロードは少しゆったりした時間を過ごす。

そんな彼に、アモンは「それで、相談ってなんなの?」とぶっきらぼうに聞いた。

クロードは目的を思い出し、ここに来た事情を説明する。

「——というわけなんだ。で、お願いなんだけど……魔の大森林を調査するために、調査用ゴーレムを作ってくれないか? 出来るだけ急ぎで。それもたくさん」

「なるほど。理解したわ……その頼み、引き受けてあげる。でも、代わりに一つ条件があるわ。この条件を呑んでくれるなら、急いで作ってあげましょう」

「わかったよ。その条件っていうのはいったい何かな?」

アモンが恥じらうように視線をそらす。

「……今、ミーガン領で流行っている甘味？ スイーツとかいうやつが欲しいのよ。食べた事がな
いから、食べてみたい……ダメ？」

アモンは首をコテンツと傾げ、可愛らしく尋ねた。

クロードはアモンの微笑みの前に何も抵抗出来ず、彼女の条件を二つ返事で了承したのだった。

アモンにゴーレムの作製を依頼してから、一週間が経った頃。

マードイク領の領主邸に戻っていたクロードのもとに、アモンから五十体の調査用ゴーレムが送られてきた。なお、アモンはクランハウスにいたので、ゴーレムの運搬には転移門が使われている。届いた品を見て、クロードは息を呑んだ。

（五十体ものゴーレムを、この短期間でどうやって作り上げたんだ？ 出来るだけ早く頼むとは言っただけなのに、まさか、ここまで早く仕上げてくれるとは……恐れ入ったな）

送られてきたゴーレムの一体が持つていた紙の束を差し出す。クロードはそれを受け取り、目を通した。

どうやらこの紙の束には、ゴーレムに搭載されている機能の説明が載っているようだ。

「俺が無茶ぶりした諜報機能まで搭載されているのか！ 流石アモンだなあ。しかも全てのゴーレムに無茶ぶりを反映させているなんて……アモンには感謝しかないな。約束通り、早くミーガン領で流行っているスイーツを手に入れないと！」

クロードはゴーレムの説明書をアイテムボックスに入れると、近くを掃除していたルシファアの配下——悪魔族のメイドに声をかけた。

「君。悪いんだけど、ちょっと頼まれてくれるかな」

「はい、かしこまりました我が主よ。頼み事とはなんでございましょう？」

「ああ、実は、アモンにミーガン領で流行っているスイーツが食べたいって言われていて……はい、これお金ね。せっかくだし、君の分や他のみんなの分も買っていいからさ。それじゃあ、お使いをお願い！」

クロードの指示を受け、悪魔族メイドはその場でバツと敬礼する。

「お心遣いいただき、感謝いたします。お任せください。この任務、完璧に遂行してみせます……主への礼儀を知らない、アモンへのお土産というのが、少し気に入りますが」

クロードに聞こえないよう最後の部分は小声で呟き、悪魔族のメイドは『転移』していくのだった。

メイドを見送ったクロードは早速、届いたばかりの調査ゴーレム五十体に指示を出し、魔の大森

林へ向かわせた。

「よし、俺達も準備して調査に向かうとするか」

もともと、クロード達も今日、魔の大森林の初調査に行く予定だったのだ。

クロードは自室に戻って支度を終え、一緒に調査する事になっていた面々——ケイトとマルティ、レイア、五つ子狼達、マールが待つ一階のリビングへ向かった。

「みんな。お待たせ。実はさっきゴーレムが届いてね。既に調査に取りかかってもらっているんだ。彼らに後れを取らないように、俺達もそろそろ出発しようか」

クロードはケイト達を連れて魔の大森林に入り、黒竜と遭遇し、討伐した場所にやって来た。

そこには、何故か著しく損傷したモンスター達の死骸が山のように積み上げられていた。

そのそばでは、今もモンスターの死骸を積み上げている調査用ゴーレムの姿がある。

「……な、なんだ、これは!？」と、とりあえずこの辺りをまずは調査してみるか」

クロード達はいくつかのパーティに分かれて、調査を開始する。

クロードと五つ子狼の一匹……イリアのパーティは他のみんなと別れたあと、黒竜が進行してきた道を辿ってみる事にした。

しばらく黒竜が来た道を辿っていると、ちらほらとポロボロのモンスターの死骸を運んでいるゴーレム達の姿を見かけるようになった。

さらに進んでいくと、モンスターの死骸がそこかしこに転がっているではないか。

「……どうやらこの先に何かがあるみたいだな。イリア、俺から離れないようについてきてくれ」それからしばらく進んでいくと、ポツンと巨大な口を開けるダンジョンらしき洞窟と、その洞窟の前に横たわる巨大なモンスターの死骸が姿を現した。

「……この惨状……まさか、ダンジョン内でスタンピードが起こったのか。もしそうなら急いでここを探索しないと。このダンジョンから伝わる魔力の感じ……まだスタンピードは終わっていないかもしれない」

クロードが今回つけた新ダンジョンについて悩んでいると、分かれて調査をしていた他のパーティもダンジョンの前に集まってきた。

「……主様よ、この洞窟はダンジョンか。しかし、物凄い量の魔力を垂れ流しておるのう。この分じゃとそこらへんに転がっているモンスターの死骸は、地上まで逃げてきたスタンピードの第一波かもしれないのう。直ぐに対処に当たらないと、第二波や第三波が来てしまうのじゃ」

「ああ、わかっているよ……それで、マール。この魔力の感じだと、あとのくらいで次のスタンピードが起こると思う？」

「そうじゃのう。だいたい一週間といったところか。それも確かじゃないからのう。もっと早いかもしれないのじゃ」

ダンジョンの状態を確認したクロードは、魔の大森林の調査をさせていたゴーレム達を全て集めた。

「お前達にはこれからこのダンジョンを探索してもらう」

クロードはアイテムボックスから様々な道具を入れたアイテムバッグを取り出し、それをゴーレムに託す。

そして、彼らをダンジョン調査に向かわせたのだった。

ゴーレム達を見送ったクロード達が、屋敷に戻ってから数日が経った。

彼らは魔の大森林からまばらに出てくるモンスターを討伐しながら、ダンジョンを探索しているゴーレム達からの報せを待っていた。

そんなある日の事。クロードが領主邸のリビングでまったりしていると、屋敷の一階にある転移門が突然起動した。

そして、ネックにある克蘭ハウスで魔道具の研究に勤しんでいるはずのアモンが、少し焦った様子で門から現れる。

「アモンじゃないか！ そんなに慌てていったいどうしたの？」

迎えたクロードを、アモンはジロツと睨んだ。

「むっ!! 見つけたわよ!! ……直ぐにゴーレム達のところに行くわよ!!」

「えっ!? ゴーレム達のところに行くって、いったいどう事だ!？」

アモンがその質問に答える事はなかった。

彼女はクロードの服の袖を掴み、彼を引っ張ってとっとと屋敷の外に出ていってしまふ。

その一部始終を、困惑しながら見ていた『守護者の集い』とルーチェ。

クロードを連れていってしまったアモンの真意を知るために、彼女達もまた、屋敷をあとにするのだった。

アモンに無理やり連れていかれたクロードは、数日前に自分達が発見した、ダンジョンの前に立っていた。

「ここは……」

クロードもまたアモンの真意がわからず、ダンジョンの前で困惑する他ない。

すると、ダンジョンの入り口から何かが出てくる気配がした。

一気に警戒度を強める彼の前に、なんと数日前にダンジョン探索を命じたゴーレムの一体が現れた。

しかも、まだ後ろから続々とゴーレム達が続いてくるではないか。どの個体も、著しく損傷した状態だ。

「……これはいったいどういう事なんだ!？」

「……」

アモンがクロードの疑問に答える事はない。

そうこうしていると、二人のあとを追って屋敷を出たケイト達がダンジョンの前に到着した。

「やっと揃ったわね。私はあなたの言う事を聞いてゴーレムを作り、納品した。だから、どう使おうがあなたの勝手だけど……この子達ばかりに働かせるなんて、あんまりだわ! この子達はこれから、私のところで修理とメンテナンスに入るから。ここからの探索はあなた達でやって。じゃあね」

アモンは言いたいだけ言うとゴーレム達を連れ、転移魔法で克蘭ハウスへ帰ってしまう。

その場に取り残されてしまったクロード達だが……ダンジョンを調査する準備など、何も出来ない。

耳が痛くなるアモンの指摘に肩を落とし、彼らは領主の屋敷に戻るしかなかった。

翌日。

アモンに怒られ、クロードはゴーレム達に頼りすぎであった事を反省した。

そして彼は、メイドに頼んでいたお使いの品——ミーガン領で入手した人気スイーツの他、たくさん甘味を持って、婚約者達と共にネットクにある克蘭ハウスを訪れた。

克蘭ハウスの横に建てられた小屋の中からは、絶えず作業音が聞こえてくる。

「……アモン。少しいい?」

クロードはそう声をかけてから、扉を開け、みんなで小屋の中に入った。

空間が拡張された小屋の奥には、広めの部屋が設けられている。その部屋から「……どうしたの」と無愛想な返事があった。

「昨日の事で謝りたくて……みんなで反省したんだ。お詫びに、ミーガン領で流行っているスイーツや色々な甘味を持ってきたよ」

すると一拍置いて、部屋の扉が勢いよくバン! と開いた。

部屋から出てきたアモンは、緩み切った顔でクロードが持つお土産を見たあと、ハッと我に返る。そして直ぐに表情を取り繕い、「そう。良い心がけね。とりあえずまあ、座って」と言つて、小屋にあった椅子をすすめた。

クロード達は席に着き、改めてアモンに対して謝罪する。

しかし、アモンの関心は既にクロードにはなかった。

テーブルの上に置かれたお土産のスウィーツが気になって仕方がないのか、しきりにそちらを見ている。

そこでクロードは謝罪を早々に切り上げ、机の上に置かれていたお土産を手に取り、アモンに差し出した。

「アモンには、謝罪の言葉よりこっちの方がよかったかな」

「……まあね。私も怒りすぎたと思つていたから」

アモンはそう言うと、差し出されたスウィーツの箱に飛びつく。

そして、箱を開けるや否や、スウィーツをモリモリ食べ始めたのだった。

アモンがお土産を食べ終えるのを待つて、クロードは話しかける。

「……それで、ゴーレム達の事を聞いてもいい？ 何が起つたのか、さっぱりで……今、どうなつているの？」

「……基本的な修理はだいたい終わったわ。まあ、今後もダンジョンを探索させたいなら、改良が必要ね。私のゴーレム達はAランクのモンスター相手なら問題なく勝てるし、Sランク下位のモンスターまでなら対処出来るはず。でも、あの子達はあんなボロボロになつて戻ってきた。あのダンジョンには中々の強敵が潜んでいるはずよ」

「……なるほど。という事は、あのダンジョンの中には少なくともランクS上位以上のモンスターがいるんだな」

「うん……そう」

アモンはクロード達のそばに置いてある荷物をチラッと見て、「これからダンジョンに行く気？」と尋ねた。

「ああ。早く対処しないと、近隣の領に被害が出ると思つてね。アモンの推測が当たっていたら、俺達が考えていた以上に急がないといけないな」

果たして、クロードの言葉を聞いて何を思つたのか。

アモンは席を立ち、奥の部屋へ引っ込んだ。

少しして、彼女は小さなポーチを持って戻ってくる。

「これ、持つていつて。ゴーレムの修理は間に合わないけど……代わりに。便利アイテムが入つてゐるわ。ピンチの時に使つて」